

朗読という音声表現から詩歌の本質に近づく

——「声に出して読みたい」それからどうする？——

国語科 渡 辺 康 英

1. はじめに

声に出してみるものの効果を求めて、声に出してあたりまえの「詩」を朗読することを中心にすえた授業を構成した。どう朗読すればすてきな朗読になるのか、声で表現しようとするときの難しさに気づき、表現の仕方を考えることが詩の内容理解を深めることに通じるはずだと思い、授業構成を試みた。グループ学習によって生徒同士の意見交換を中心に、指導者は助言をするかたちで授業を展開した。

音読と朗読のちがいについてはいろいろと説明されているが、書かれていることを適切に読むことが音読、作品にある思いや情感を再表現することが朗読だと私は思っている。内容を理解していなくても正確に読みあげれば音読だろう。しかし朗読は作者の思いを「再表現」するのである。作品にこめられた思いや情感をどう再表現するかが課題である。今回は詩を扱うが、その思いを伝えようとするにあたっては、作者の与えてくれた文字情報である詩を読み、解釈をし、自分の言葉にして表現しなければならない。理解のすすまないうちには朗読はできない。生徒は声にしてみることによって自分が表現できないところがあることに気づく。この行は何を伝えるためにあるのか、この連の位置づけはどうなのだろう、主題は、と考えざるを得ない。解説を聞く授業とは違う取り組みがある。

2. 授業展開の概容（6時間構成）本時は4・5時

1時：近現代詩の流れ：国語便覧を参照し、新体詩・浪漫詩・象徴詩～モダニズム～戦後の詩までの流れを紹介し、教科書・便覧に挙げられている作品とその特徴にふれる。

2時：モダニズム・前衛詩の世界：プリントにより視覚的な効果を持つ詩などを紹介。型にはまらない表現にふれ、詩のおもしろさの一面を知る。

3時：詩の音韻・音律：ソネットやマチネ・ポエティックによる定型押韻詩を紹介。声に出してみることによって、韻とリズムの効果を体感する。古典の和歌に見られる定型のリズムや韻についてもふれる。

4・5時：朗読に取り組む（本時）：6つの詩を用意し、グループで朗読に取り組む。背景の解説など一切なしに文字情報としての詩を解釈をする。グループごとによいと思われる朗読をつくり、発表する。

6時：まとめ：それぞれの詩について、背景的なこと、解釈の補足などを行い、理解を深めさせる。

本時のおよその流れは次のようになる。6～7人のグループ活動である。6つのグループが6つの詩を分担し同時展開で取り組む。

- I グループ内で一人ずつ音読をし、お互いに聞き合う。
- II 読んでみて読みづらかった部分についてメモをとる。
- III だれの音読が感じよく聞こえたか、どの点がよかったのか感想の交換をする。
- IV 相互に疑問点を述べ、意見交換する。(適宜授業者による助言)
- V よりよい朗読にするためにはどうするとよいのか、意見交換する。
- VI 朗読発表のしかたを考え決定する。

朗読の形としては、一人による朗読。数人でパートを分けての朗読。グループ全体での群読などが考えられる。解釈については定番の解釈のある詩もあるが、ここでは生徒の解釈を活かしていきたい。あまり空想的にならないよう机間指導にて留意をする。次にグループごとに発表を行わせる。

- i 朗読をおこなう
- ii 他のグループの生徒は聞きながらよかった点、疑問点などをメモする。
- iii 語句・解釈についての質問とその応答をおこなう。
- iv 必要なら授業者が助言を行う。
- v 授業者は技術面などに助言できることがあればおこなう。

3. 使用した教材

一つのメルヘン	中原中也
足と心	中桐雅夫
そこにひとつの席が	黒田三郎
きゅうり	八木幹生
木	田村隆一
最後の箱	中野重治

(いずれも高等学校用の教科書によく採録される作品である)

4. 研究協議・反省

おおむね、生徒の積極的な活動、自由闊達な意見交換を評価していただけた。しかしながら自由奔放すぎる生徒の解釈も飛び出し、この後の授業展開が気になるというお声を多数いただいた。実際まとめとなる最終時において中也の詩の解釈で時間がかかった。抽象的な詩はさまざまな解釈が可能である分だけおもしろくはあるが、一度思い込んで解釈をしてみた生徒たちの理解を修正しなくてはならないのは大変であった。教材の選定に問題があったと言わざるをえない。抽象度の高い詩はこの取り組みには適切ではないということになる。今後も朗読するのによりふさわしい詩を探し求めたい。

生徒の事後の感想としては、「読む人によって表現のしかたがいろいろになる。声に出すことで、ただ言葉で説明するのとはちがう何かがあることに気づいた」「ただ目で詩を見ているだけだと伝わらないことが声にして、耳で聞くことでわかることがあるのがおもしろかった」など、「またやってみたい」という。そう詩の授業ばかりしてられない。次は小説教材の中での朗読の組み込みを模索したい。